

9. これからの美術館について

07.04・24

美術館・博物館はどこでも入場者数の減少に頭を痛めており、活性化策や将来展望を必死に考えている。そこで私は、これからは、美術館としてではなく世の中の情操教育の拠点として積極的に打って出るべしと主張したい。

「技術偏重社会から脱却して感性豊かな社会をめざす」というスローガンで世に出て久しいが、実際には教育ひとつとっても、初等中等教育では図画工作、美術、音楽の授業時間は減る一方であり、中教審では中学校の美術や音楽は選択科目にするといった方向が検討されているとも聞く。このような状況において、果たして子供の感性が果たして育ていけるのであろうか、またそうした動きに対して市民の感性が鈍感になっていくのではないだろうか。今まさに、世の中の感性が問われているといえよう。

私は、世の中の改革を大上段に構えているのではなく、そうした時代だからこそ、全国津々浦々、人間らしさを育むように、まずは美術から動きをスタートさせてみてはと思っている。すなわち、感性の育成として、美術館と学校がタイアップして、あるいは家庭とのタイアップで、美術愛好家を育てるということではなく（それもありがたが）、美術の理解者を増やすということを、抜本的に考えてみたい。そのためには、美術館が地域の感性の拠点となるよう、市民の憩いの場であるようにしたい。もちろん、美術の企画展をどのように展開するかといった根本的なこともまた重要ではあるが、これについては他の方にお任せして、私はいまま少し広い意味でのソフトの整備について以下に数点を主張したい。

(1) 美術館に行けばいつでも「美術が開かれている」。誰かがいて美術の話がいつも聞けるというようにしたいものである。また、(美術館の庭となっている)芝生広場にも美術品を並べておいて、楽しめるようにそれをもって遊べるようにしたいものである。要は、市民は生活の営みの中で学び、子供は遊びの中で学ぶ。そこに美術的な感覚が育つように作品とのふれあいを大事にしたいものである。

(2) 家族連れで訪れることができるように、お話スペースを設ける。学校の授業参観を美術館でやっていただくということも考えられる。また、町内会とのタイアップで、ご町内への働きかけや町内会の来場での教育というか懇談会のような働きかけがあってもいいと思う。

(3) ひとつ大事なことを指摘したい。来場者数減少イコール市民の美術意識の低下といった単路的な見方が横行している。とんでもないことである。美術館にしょっちゅう足を運ばなくても美術愛好者や美術理解者の市民は多く、彼らの心に美術の火が灯っていることもまた評価すべきことである。「おらが街におけるおらが美術」。こうしたことがしっかりと市民社会に根

付いていくようにしたいものである。